

シャー・イスマール「シーア派国教宣言」とは何か

-それはサファヴィー朝初期の年代記にどう描かれているのか-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 駿台史学会 公開日: 2019-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平野, 豊 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19957">http://hdl.handle.net/10291/19957</a>

## シャー・イスマール 「シーア派国教宣言」とは何か

—それはサファヴィー朝初期の年代記にどう描かれているのか—

平 野 豊

**要旨** シャー・イスマールはシーア・イマーム派をサファヴィー朝の公認宗教に定めた。シャーが自らそれを宣言したのではなく、説教師に命じてミンバル壇上から12イマームの名前でフトバを読ませたのである。S. A. Arjomand氏はシャーのこの措置を「シーア派国教宣言」と命名した。だが、その論拠となったイスマールの伝記は、彼の死後150年以上経過した後に書かれた作品であることがわかっている。小論は、Arjomand氏の主張が、サファヴィー朝初期の年代記によっても裏付けられるのかどうか確認したものである。

そして、考察の結果、「シーア派国教宣言」とは以下に記すシャーの命令の総体であることが判明した。

- (1) 金曜礼拝のフトバから正統カリフの名前を外し、代わりにアリーを含めた12人のイマームたちの名前を入れること。
- (2) 礼拝その他のイバーダートをイマーム派の流儀で指導監督すること。
- (3) アザーンに、「アリーは神の友であると私は証言する。」と「いざ至善に来たれ。」「ムハンマドとアリーは至高の人間なり。」の文言を追加すること。
- (4) 各地のモスクにあるミフラブを、イマーム派の流儀に合わせて改修すること。
- (5) キズイルバーシュたちは赤いタージの着用目的と製法を理解した上で、合戦時にはそれをきちんと着用すること。

キーワード：シーア派、サファヴィー朝、シャー・イスマール

## はじめに

イスラーム世界におけるイランの独自性というものを考える場合、まず真っ先に挙げられるのは、少数派であるシーア・十二イマーム派を国教としているという事実であろう。では、イランのシーア派化はいつ頃よりいかなる事情で進行したのか。未だ判然としないこの難題について調べようとする場合、西暦16世紀初頭、それまで東西に分裂していたイラン世界を再統合し、以後二百年以上も続くことになるシーア派国家体制を敷いたサファヴィー朝とその宗教政策が、一つの重要な考察対象となることは間違いない。そしてその際には、初代君主シャー・イスマーイール Shāh Ismā'īl (Shāh Esmā'īl-e Ṣafavī: 892-930/1487-1524 年。907-30/1501-24 年在位。) が建国直後に行ったとされる「シーア派国教宣言」が、時系列的な意味合いからも、最初の出発点とされて然るべきだと考える。

ところで、サファヴィー朝の年代記に「シーア派国教宣言」に相当する表現は存在しないという事実をご存じであろうか。実は、この名称は、Said Amir Arjomand氏が西暦1980年代半ばに刊行した著書で使用し、世に広められた造語なのである。氏は大英図書館所蔵の歴史書の一写本から、タブリーズ征服直後の若きイスマーイールの姿が描かれた一枚のミニアチュールを選び、「シーア派国教宣言(1501年)」(“The declaration of Shi'ism as the state religion of Iran in 1501.”)という仮題を付した<sup>(1)</sup>。そして、イランがシーア派国家へと転じた歴史的瞬間を描いた一枚として、それを目次頁への口絵とした。(→ [図1]) 当時、上記の写本は、初期サファヴィー朝史研究のための基本史料と見なされていた。そのためか、この口絵が読者に与えた視覚的効果は大きく、「シーア派国教宣言」の名を世に広める一助となったことは疑いない。

しかしながら、上記の写本が当初の想定よりも120年以上後、すなわち、イスマーイールの没後150年以上後に書かれた作品であること、物語の相当部分が劇化されていることが、1990年頃までに解明された。したがって、「シーア派国教宣言」にも同時代史料に基づく再検証が必要な状況となった。しかしながら、当該分野の専門家たちの関心がサファヴィー朝の中期から後期に集中していたという事情もあり、正面から批判的検討が加えられるべき時機を逸したまま、今日に至っているというのが実情である<sup>(2)</sup>。

そこで本稿では、サファヴィー朝初期の年代記から即位直後のイスマーイールが発した宗教上の諸命令を抽出し、Arjomand氏が提唱した「シーア派国教宣言」の要点との照合を行う。その際には、Jean Calmard氏やRosemary Stanfield-Johnson氏によるシーア派儀礼研究など、本来であれば「シーア派国教宣言」の欠を補うものとなり得たはずの先行研究にも可能な限り言及する<sup>(3)</sup>。また、「シーア派国教宣言」の暦年についても改めて検討したい。というのも、今回、その存在を確認できた三種類の紀年銘が、現在定説となっているヒジュラ暦907年とは

異なる数値で一致するためである。なお、本稿では16世紀初頭当時の用例に倣い、十二イマーム派に代えて専ら「イマーム派」の名称を用いる。本文中で使用される史料の略号については以下の通りである。

【HS】(930/1524年成立) : Ghiyāth ad-Dīn b. Homām ad-Dīn al-Ḥoseynī (= Khwānd Amīr), *Tārīkh-e Ḥabīb as-Siyar*, ed. Moḥammad Dabīr Siyāqī, 4vols., Tehrān (1333AHS/1955).

【FSh】(927/1521年執筆開始) : Amīr Ṣadr ad-Dīn Ebrāhīm Amīnī-ye Heravī, *Fotūḥāt-e Shāhī*, ed. Moḥammad Reżā Naṣīrī, Tehrān (1383AHS/2004).

【LT】(948/1542年頃成立) : Yaḥyā b. ‘Abd al-Laṭīf al-Ḥoseynī al-Qazvīnī, *Lobb at-Tavārīkh*, ed. Seyyed Jalāl ad-Dīn Ṭehrānī, Tehrān (1314AHS/1935).

【ZHS】(957/1550年成立) : Amīr Maḥmūd b. Khwānd Amīr, *Īrān dar Rūzgār-e Shāh Esmā‘īl va Shāh Ṭahmāsb-e Ṣafavī*, ed. Gholām Reżā Ṭabāṭabā‘ī, Tehrān (1370AHS/1991).

【ZHS2】 : Amīr Maḥmūd-e Khwānd Amīr, *Ṭārīkh-e Shāh Esmā‘īl va Shāh Ṭahmāsb-e Ṣafavī: Zeyl-e Tārīkh-e Ḥabīb as-Siyar*, ed. Moḥammad ‘Alī Jarrāhī, Tehrān (1370AHS/1991).

【IN】(972/1564-65年頃成立) : Khūrshāh b. Qobād al-Ḥoseynī, *Tārīkh-e Īlchī-ye Neẓām Shāh*, ed. Moḥammad Reżā Naṣīrī & Koichi Haneda, Tehrān (1379AHS/2000).

【JA】(972/1564-65年頃成立) : Qāẓī Aḥmad-e Ghaffārī-ye Qazvīnī, *Tārīkh-e Jahān-ārā*, ed. Ḥasan Narāqī, Tehrān (1343AHS/1964).

【TA】(978/1571年成立) : ‘Abdī Beyg-e Shīrāzī, *Takmelat al-Akhhbār*, ed. ‘Abdol-Ḥoseyn Navā‘ī, Tehrān (1369AHS/1991).

【Javaher】(984/1576年成立) : Būdāq-e Qazvīnī, *Javāher al-Akhhbār : Tārīkh-e Ṣafavīye az Āghāz tā 984HQ*, ed. Moḥammad Reżā Naṣīrī & Koichi Haneda, Tokyo (1999).

【AT】(985/1578年成立) : Ḥasan Beyg-e Rūmlū, *Aḥsan at-Tavārīkh*, ed. ‘Abdol-Ḥoseyn Navā‘ī, 3vols., Tehrān (1384AHS/2005).

【KhT】(999/1590-91年成立) : Qāẓī Aḥmad b. Sharaf ad-Dīn al-Ḥoseynī al-Qommī, *Kholāṣat at-Tavārīkh*, ed. Eḥsān Eshraqī, 2vols., Tehrān (1359AHS/1980, 1363AHS/1984).

【RS】(成立年代未詳) : Mīrẓā Beyg-e Jonābādī, *Rouẓat as-Ṣafavīye*, ed. Gholām Reżā Ṭabāṭabā‘ī, Tehrān (1378AHS/1999).

【ASS】(1086/1675-76年成立) : Anonym, *‘Ālam-ārā-ye Ṣafavī*, ed. Yadollāh Shokrī, Tehrān (1350AHS/1971).

## 1. 「シーア派国教宣言」の典拠

### (1) 大英図書館所蔵 Or.3248 写本と【AAS】の関係について

Arjomand氏が「シーア派国教宣言」の論拠に用いたのは、『シャー・イスマールイールの歴史 (*Tārīkh-e Shāh Esmā'il-e Šafavī*)』の仮称が付された、大英図書館所蔵 Or.3248 写本（別名 "Ross Anonymous"）である。当時、この写本の成立年代については、947/1540～955/1548年頃を想定されていた<sup>(4)</sup>。しかし現在では、羽田亨一氏や A. H. Morton 氏の研究により、『ルスタム・ハーンの歴史 (*Tārīkh-e Rostam Khān*)』（1104/1692-93年成立）の著者でもある17世紀後半の歴史家ビージャーン Bijān により書かれた可能性の高いことが判明している<sup>(5)</sup>。

一方、この作品には、異なる底本に基づいた二種類の校訂テキストがある。その片方、すなわち、『サファヴィー家の世界を飾る書』の書名で出版された版本【AAS】には、幸いにも、執筆時現在の暦年として、1086/1675-76年の日付が明記されている<sup>(6)</sup>。テキストを批判的に読むためには、史料成立年が判明していることが望ましいのは言うまでもない。以上の理由から、本稿では Arjomand 氏の主張内容を【AAS】の本文により検証する。

### (2) 当該記事の紹介と四つの要点

冒頭でも述べたとおり、「シーア派国教宣言」というのは、第一に、Arjomand氏がその著書の口絵に用いたミニアチュールへの仮題である。また、それと同時に、シャー・イスマールイールがシーア・イマーム派を国是とするために取った行動そのものを指しているようだ。その要点を整理する前に、まずは【AAS】の当該記事を紹介したい。

本作品には、「シャー・イスマールイールがハサン・パーディシャー Ḥasan Pādeshāh（アクコユンル朝第5代君主。1452-78年在位。）<sup>(7)</sup>の玉座に就いたこと」という題目で、タブリーズ占領直後の様子が描かれている。全文を引用するには長すぎるので、その概要を以下に記す。例外措置として、Arjomand氏が自著で引用した箇所については太字で、また、イマーム・アリー Emām 'Alī からの夢のお告げや会話部分については「」で囲った上で、それぞれ逐語訳とする。なお、下線部は Stanfield-Johnson氏が論文で引用紹介した箇所であることを示すものである。

**史料1:** シャール (Sharūr) 近郊の戦いでアゼルバイジャンの支配者アルワンド・パーディシャー Alvand Pādeshāh (アクコユンル朝第12代君主。1498-1504年在位。)の大軍を破ると、イスマールイールは敵の国庫を開き、キズイルバーシュたちに分配することで彼らの労に報いた。「アリーは神の友」というシーア派の文言でスイッカが打たれ、フトバが読まれた。だが、後者については、キズイルバーシュの間から危惧する声が上がった。というのも、王都タブ

リーズには20万から30万もの住民がおり、しかもシーア派のフトバに馴染んだ者など誰もいなかったから。「我々はシーア派の王など望んではない！」と言って彼らが一斉に騒ぎ出したりしたら大変だというのである。

これに対してイスマーイールは、イマーム・アリーと同じ正道を進む者には必ずや神の加護があるので、自分は何者も恐れてはいないと応じた。そして、もし面と向って異論を唱える住民がいたならば、見せしめとして、一人を殺めるつもりだと言った。

しかし、イスマーイールは、内心ではキズイルバーシュたちが正論を言っていることは理解していた。迷いを感じつつも眠りに落ちたその日の夜更け、夢の中で闇に差し込む一条の光を見ると共に、アリーから次のようなお告げを得た。

「おおわが子よ！心配するな。金曜日、そなたはこう命じなさい。

一、キズイルバーシュは完全武装で来るべし。

一、兵士二人の間に住民を挟むべし。

一、フトバの際、もし住民がその場から立ち去ろうとしたならば、キズイルバーシュはその者を捕らえて殺すべし。

そして、今言った方法でそなたが命令し、フトバを読ませなさい。」

夢から覚めたイスマーイールはすっかり元気を取り戻した。そしてすぐにキズイルバーシュの長老たちを呼び、昨夜の夢の詳細を伝えた。彼らは大いに納得し、こうしてフトバの決行が決まった。

金曜日、イスマーイールはタブリーズの会衆モスクに行った。そして、シーア派の名士の一人だったマウラーナー・アフマド・アルダビーリー Moulānā Aḥmad-e Ardabīlī にミンバル壇上に昇るよう命じた。シャー自身もミンバルの正面に進み出た。そして、世界を征服した【時代の主 (= 12代目イマーム・ムハンマド・アルムンタズイル) 一彼の身に平安あれ一】 剣を抜いた。それは太陽のように輝いた。

アルダビーリー師がフトバをシーア派の流儀で読み始めるや、モスク内は案の定、大騒ぎになった。タブリーズの三分の一の民 (do dāng-e ān shahr) は歓迎の意を示したが、残りの三分の二はその場から立ち去ろうとした。するとキズイルバーシュの若い兵士たちが、打ち合わせ通り左右から近づき、それを阻止した。(以下省略) ([AAS] 63-65)

かなり長い引用となったが、これは太字箇所を理解のためには前後の文脈が欠かせないとの

判断によるものである。ここで史料1と Arjomand 氏の著書に基づき、さらには桜井啓子氏の見解<sup>(8)</sup>も参考にした上で「シーア派国教宣言」の要点を整理すると、①「西暦 1501 年秋の金曜日」に、②「イスマーイールが金曜礼拝に赴き」、③「シーア派の名士であるハティーブ（説教師）に」④「シーア・十二イマーム派を王朝の公認宗教とする旨を宣言させた」の四点となる。決してイスマーイール自身がシーア派の国教化を宣言した訳ではない点に注意されたい。以上を踏まえた上で、いよいよ、上記の四点がサファヴィー朝初期の年代記にも記されているかどうかの確認作業に入る。

## 2. 『ハビーブツ・スイヤル』より当該記事の紹介

### (1) 史料解題と記事構成の三要素

著者ホーンダミールは 880/1475-76 年頃、ティムール朝支配下のヘラートで生まれた。彼はイスラーム通史の大作『ラウダト・アッサファー (Rouzat as-Ṣafā')』の著者としても知られる歴史家ミール・ホンド Mir Khwānd の外孫にあたり、幼少時には祖父の指導で学んだ時期もあった。青年期からは文人宰相ミール・アリー・シール・ナワーイー Mir 'Alī Shīr-e Navā'ī に師事した。本史料の編纂については、927 年の初め頃（1520 年末～1521 年初）に着手し、930 年ラビー・アルアッワル月（1524 年 1 月中旬～2 月上旬）に完成したとされる。だが、著者自身の弁によれば、実際にはそれよりもずっと前の 907/1501 年、敬愛する恩師アリー・シールが亡くなった際、本書執筆を心に誓ったという。（【HS】 I: 5-11, III: 289）

つまり、「シーア派国教宣言」がなされたちょうどその頃、当時 26 歳前後のホーンダミールは、本史料編纂のための準備と情報収集を開始していたことになる。一つ難があるとすれば、ティムール朝支配下のヘラートに居住したまま 1,800km 以上離れたタブリーズの出来事を描いている点であろうか。九年後の 916/1510-11 年、サファヴィー朝遠征軍がヘラートを占領した際にイスマーイールが行った「ホラーサーン州におけるシーア派国教宣言」の情報量の多さに比べると、物足りない面があるのは否めない<sup>(9)</sup>。その傾向は、ホーンダミールと同世代で、ヘラートの住民という点でも共通していたサドルッディーン・イブラーヒーム・アミーニーの歴史書『フトゥーハーティ・シャーヒー』においてさらに大きい。同書が有する史料的価値の高さに比して、タブリーズ征服時の記事（【FSh】 174-175）は例外的に空疎で、残念ながら、今回は利用を見合わせた。

また、【HS】の当該記事は概ね、A：指示・命令の具体的内容、B：命令先、C：その後の変化の三要素から成り立っている。そのうち本稿に関係するのは A と B のみで、C については考察対象から除外することを了解されたい。これは、オリジナルの「シーア派国教宣言」に、後年発せられた宗教上の諸命令が混入するのを、可能な限り避けるためである。

## (2) 当該記事の紹介

ホーンダミールは、イスマーイールがタブリーズ征服後、王として熱意をもって取り組んだこととして、「至高のマズハブ（法学派）であるイマーム派の強化 (taqvīyat-e mazhab-e 'alīye-ye Emāmīye)」を真っ先に挙げ、以下の事柄を命じたことを伝える。既に Stanfield-Johnson 氏による簡略な紹介があるが<sup>(10)</sup>、改めてここで全文を紹介する。

史料 2：「…また、即位当初に (dar avval-e jolūs-e homāyūn), 以下のような必ず従うべきファルマーンが施行の榮譽を得た。すなわち、アゼルバイジャンの諸都市のハティーブたち (khoṭabā-ye mamālek-e Āzərbayjān) は、フトバを 12 人のイマームの方々復活の日まで彼らの上に神の平安がありますように一の御名<sup>(11)</sup>でもって読むべし。すべての都市の礼拝指導者たち (pīshnamāzān) は、礼拝その他のイバードートの実施にあたって (dar eqāmat-e ṣalāt va sāyer-e 'ebādāt), 異端者 (mobtade') の悪しき行いを止めさせるべし。モスクのムアッズインたち (mo'azzenān-e masājed o ma'ābed) は、「アリーは神の友であると私は証言する。」という文言 (lafz-e ashhad anna 'Alīyan walī-yullāh) を、アザーンの言葉の中に加えるべし。敬虔なる聖戦士たち (ghāziyān-e 'ābed o lashkariyān-e mojāhed) は、イスラーム (mellat-e beyzā) に反する行為をする者を見かけたならば誰でも、その首を胴体から刎ねるべし。」 ([HS] IV :467-468)

史料 2 の要点をより簡潔にまとめると、次のようになる。

A : 命令内容 → B : 命令先

(i) 12 イマームの名前でフトバを読み。

→アゼルバイジャン州のハティーブたち

(ii) 礼拝その他の儀礼的規範について正しく指導せよ。

→すべての都市のピーシュナマーズたち

(iii) 「アリーは神の友であると私は証言する。」という文言をアザーンに追加せよ。

→モスクのムアッズインたち

(iv) イマーム派信仰に反する行動を取る者を見かけたら首を刎ねよ。

→キズイルバーシュたち

宗教政策としてイスマーイールが誰に何を命じたのか、これを見れば一目瞭然であろう。総じて言えるのは、イマーム・フサイン殉教劇やガディール・フナムの祝日などの大掛かりな記念行事の復活ではなく、その気さえあれば今すぐにも実行可能なものばかりだった点であろうか<sup>(12)</sup>。また、ハティーブやピーシュナマーズ、ムアッズインたちといった末端の当事者に、

直接命じられているという点も興味深い。

この中で最も優先順位が高かったのは、おそらく (i) である。後続の年代記の多くがホー  
ンダミールに倣い、この記事を紹介しているからである ([TA] 41, [Javaher] 22, [AT]  
976, [KhT] 73)。では、この命令にはどのような意図があったのであろうか。

### (3) 12 イマームの名でフトバを読めという命令の意図について

まずは命令先について。アゼルバイジャン州のハティープたち、すなわち、同州所在のすべ  
での金曜モスクの説教師たちに宛てたものである点が注目される<sup>(13)</sup>。イスマールによる  
タブリーズ征服はほぼ無血で達成され、前支配者アルワンドは、彼に残されたもう一つの支配  
地ディヤールバクル州に逃亡した。したがって、この時、アゼルバイジャン州全土がイスマ  
ールのものとなったと言ってよい。つまり、時代考証的な観点からも、この命令先は理に適っ  
ていると言えよう。

次に命令内容について。これは想像以上に苛酷な要求だったと思われる。というのも、それ  
まで常時フトバに読まれてきた正統カリフたちの名前からアブー・バクルとウマル、ウスマ  
ーンの三人を外すことことはもちろん ([IN] 17)、上記三名のカリフに対する呪詛が命じられ  
た可能性が極めて高いからだ ([KhT] 73)<sup>(14)</sup>。だがホーンドミールはそのような書き方は避  
けている。それは一体なぜか。

この件について、Calmard 氏は極めて重要な指摘をしている。それによると、ホーンドミ  
ールは [HS] のサファヴィー朝以前の王朝史の記事において、正統カリフに言及する度に、彼  
らの名前に続けて「一彼の身に平安がありますように―」といった定番の追悼辞を挿入してい  
るという<sup>(15)</sup>。正統カリフに対する態度が作品途中で急に変わるというのは、歴史書としては  
確かに不自然である。また、久保一之氏によると、正統カリフ、とりわけ「両シャイフ」と称  
されるアブー・バクルとウマルへの侮辱は、スンナ派の民にとって異教徒になるも同然の蛮行  
とされたという<sup>(16)</sup>。ホーンドミールとしては、自らの死後の賞罰への不安や、サファヴィー  
朝の支配が長く続くとは限らないという思いから、フトバに関する命令については、無難な叙  
述に徹したものと思われる。

## 3. 『ハビープツ・スィヤル続篇』より当該記事の紹介

### (1) 史料解題

著者アミール・マフムードは、前述したホーンドミールを父に、同じく高名なミール・ホ  
ンドを祖父に持つ歴史家一家の三代目である。祖父の作品の未完部分を父が書き継いだように、  
彼も父親の作品の続篇を期して本作品を書いたとされる。953/1546-47年に執筆が開始され、  
957/1550年に完成した。著者の生年については不明だが、イスマール没年までには成年

に達していたと思われる<sup>(17)</sup>。したがって、「シーア派国教宣言」について直接見聞きした人々から十分な聞き取りができた、最後の世代の一人と考えて良い。

また、本作品には Or.3248 写本との間にテキスト上の高い類似性があり、かつては前者が後者を参照したものと目されていた<sup>(18)</sup>。実際にはその逆だった訳だが、そうすると、前述した「シーア派国教宣言」の四つの要点のうちのいくつかは、本作品により裏付けられる可能性もある。では、二種類ある版本のうち【ZHS】を正本、【ZHS2】を副本とした上で、当該記事の紹介に入る。

## (2) 当該記事の紹介

著者によれば、イスマーイールは即位後まもなくタブリーズの住民たちに次の二つの栄誉を与えたという。一つはミンバル壇上と貨幣の面を 12 イマームの名前で飾ること。もう一つは「長らくスンナ派優勢のために秘密のザーヴィヤに隠れていたイマーム派 (mazhab-e 'aliye-ye Emāmiye)」を公の場に出すことであった。後者に関して、イスマーイールは次のような指示・命令を下している。既に Calmard 氏による短い報告があるが<sup>(19)</sup>、非常に興味深い内容であるため全文を引用する。

史料 3：…また、以下のことを指示なさった。すなわち、モスクや礼拝所にてスンナ派の民のミフラブを改めるべし (dar masājed o ma'ābed, mehrāb-e ahl-e sonnat ra taghīr dahand.)。ムアッズインたちは「アリーは神の友であると私は証言する。」の文言を、アザーンにおいて、シャハーダの二証言 (= 「アッラーの他に神はいないと私は証言する。」と「ムハンマドは神の使徒であると私は証言する。」) の後 (ba'd az shahādātayn) に唱え、貴なる二つの「いざ来たれ。」すなわち、「いざ礼拝に来たれ (Hayyā 'alā 'l-ṣalāt.)。」と「いざ救済に来たれ (Hayyā 'alā 'l-falāḥ.)。」を唱えた後に、「いざ至善に来たれ (Hayyā 'alā khayr al-'amal.)。」と「ムハンマドとアリーは[至高の]人間なり (Muḥammad wa 'Alī, ['khayr] al-bashar.)。」という二つの文言を繰り返すべし、と。

また、次のような必ず従うべきファルマーン (farmān-e wājeb al-ez'ān) が発布された。すなわち、今後、イマーム派に反して礼拝 (namāz) を行う者は誰でも、貴なる聖域を守護する剣士たち (tīgh bandān-e 'atabe-ye 'aliye) がその首を胴体から切断する。また、アリーさま (Shāh-e velāyat) の友愛の御旗が掲げられる以前に、市内および州内にて朋友たちやシーア派の民 (moḥebbān o shī'iyyān) を拷問したことがある無学者や狂信者は、復讐の火の中で焼き尽くすべし、と。(【ZHS】 125-126)

前章と同じ要領で史料 3 の要点をまとめると、次のようになる。

A：指示内容 →B：命令先

- (i) モスクにあるスンナ派のミフラーブを、イマーム派の流儀に合うよう改修せよ。
- (ii) アザーンにおいて、「アリーは神の友であると私は証言する。」という文言と、「いざ至善をなすために来たれ。」および「ムハンマドとアリーは [至高の] 人なり。」の二つの文言（それぞれ二回繰り返し）に追加せよ。  
→ムアッズインたち
- (iii) 今後、イマーム派の流儀に反した礼拝を行う者は、キズイルバーシュ兵に首を刎ねられるべし。
- (iv) サファヴィー朝建国以前にアゼルバイジャン州内で、サファヴィー教団員やシーア派の民を拷問したことのある狂信者たちは、火刑に処すべし。

一見してわかるのは、ホーンダミールの記事と比べると、Aの「指示内容」が拡充しているのに対して、Bの「命令先」については疎かになっていることである。これは、当該記事に関する彼の調査方法が、公文書の精査ではなく、古老からの聞き取り主体であったことを示唆する。また、厳密には (i) と (ii) は「指示 (ḥokm)」として、(iii) と (iv) は「必ず従うべきファルマーン」として発表された。これはイマーム派への改宗命令が、少なくとも二回に分けて発表された可能性の高さを示すものである。著者は父親の挙げた四か条のうちの何を削り、何を書き足したのか。以下、それぞれについての細かい検討に移る。

### (3) イマーム派への改宗命令

まずは (i) について。先行研究として Stanfield-Johnson 氏は、なぜか【ZHS】ではなく、17世紀の年代記『ラウダトッ・サファヴィーヤ』の一写本を利用した上で、当該記事には「スンナ派の民と新セクトのミフラーブと礼拝場は、十二イマーム派の流儀に従い、交換されるべし。」などという誤訳を充てている<sup>(20)</sup>。

ただ、氏はスンナ派とシーア派の間にミフラーブをめぐる見解の相違があったこと、サファヴィー朝時代、新しいミフラーブを建造するにあたり、信徒たちが礼拝時に顔を向けるべき方角への「シーア派的に正しい座標上の位置」が議論されていたことを指摘しており、これらについては得難い知見として評価されよう<sup>(21)</sup>。

次に (ii) について。これは父ホーンダミールが指摘した文言に加え、子息であるアミール・マフムードが残る二つの文言を補ったものである。(→ [表 1]) イスマーイールがムアッズインたちに下したこの指示内容には、特筆すべき点が二つ挙げられる。一つ目は、「アリーは神の友であると私は証言する。」と「いざ至善に来たれ。」という、現在シーア派社会で定着しているアザーンの文言の復活に、イスマーイールが貢献した可能性を想定できるという点である。この件については、かつて Michel M. Mazzaoui 氏が紹介したこともある年代記『アフサン・アッ

タワーリーフ』の当該記事に言及する必要がある(22)。

著者ハサン・ベイグは、「ヒジュラ暦 907 (西暦 1501-02) 年の出来事」の条において、上記のアザーンの文言が「スルターン・トゥグルル・ベイク Solṭān Ṭoghrol Beyg b. Mikā'il b. Saljūq の到来とバサーサーリー Basāsīrī の逃亡以後、イスラームの諸都市から排除されていた」と主張し、さらに「その年から上記の年まで 528 年間〈ママ〉である」と続けた ([AT] 977)。残念ながらこの計算は間違っているのだが、その原因は、907/1501-02 年ではなく、この部分を執筆した当時の暦年 (980/1572-73 年) ([AT] 1280) から起算してしまったためと思われる。おそらく、史料上のヒジュラ暦数値としては「455 年間」が正しく、我々としては西暦への換算数値である「441 年ぶり」の復活と理解すべきであろう(23)。

Moojan Momen 氏によれば、原初のアザーン、すなわち、預言者ムハンマド在世中のそれにはこの二つの文言が入っていたものの、後に 2 代目正統カリフ・ウマルの命令により削除されてしまった。また、夜明けの礼拝への呼びかけとして「祈りは睡眠に勝る。」の文言をアザーンに加えたのもまた、ウマルであった。今日シーア派のアザーンで前者が読まれ、後者が省かれているのはそのためだ(24)。

二つ目は、「ムハンマドとアリーは至高の人間なり。」という文言の追加である。現在では必ずしも一般的でないこの文言の由来については、Calmard 氏も Stanfield-Johnson 氏も特に言及していない。筆者の知る限り、[ZHS] と [RS] 以外に当該記事を含む年代記はない。イスマールールの基本姿勢に照らせば、これが彼自身の創作である可能性はまず無く、やはりブワイフ朝時代のアザーンの復活を想定すべきかと思われる。サファヴィー朝時代には存在し、現代までには廃れたアザーンの文言という事であれば、この方面の研究に関わっている向きには注目に値する事例となろう。

続いて (iii) について。礼拝その他のイバーダートの指導はピーシュナマーズ、すなわち、礼拝指導者の責務だったとするのがホーンダミールの見解であった。それに対して、むしろキズイルバーシュ兵の責務だったとするのがアミール・マフムードの意見である。前者はキズイルバーシュ兵に反イスラーム的行動を取る者の首を刎ねる権限が与えられた旨を記したが、後者は、彼らの権限が実際にはモスク内にも及んでいたことを強調したかったのだろう。つまり、都市の住民たちにとってモスクでの日々の礼拝は、「シーア派国教宣言」を境に、文字通り命がけの宗教義務へと一変したようだ。

ところで、シーア派のイバーダートについては、一般論として、「礼拝・断食・定め喜捨・五分の一税・巡礼・ジハード・勸善・禁悪」の八項目が挙げられる(25)。ただ、命令先がピーシュナマーズだとすれば、やはり礼拝に関連した命令だった可能性が高い。では、シーア・イマーム派の流儀に則した礼拝方法とは具体的にはどのようなものだったのか。幸いにも、本史料の別版本 [ZHS2] には、その一例と思しき次のような一文がある。

史料4：今後、スンナ派の民に倣って (movāfeq-e ahl-e sonnat) 礼拝を行う者は誰でも、(また、ウドゥーの決まり事 (qavā'ed-e vozū) をスンナ派の民に倣って行う者は誰でも、) 貴なる聖域を護る剣士たちがその首を胴体から切断する。(【ZHS2】 66)

これを見れば明らかなように、具体例の一つとしてウドゥー (ヴォズー)、すなわち、礼拝前の「小浄」が挙げられている<sup>(26)</sup>。シーア派のウドゥーの作法としては、①両腕の洗浄時、水は肘から手のひらへとかけ流すように洗うこと<sup>(27)</sup>②靴を履いている場合は、必ず脱いでから両足を洗浄すること<sup>(28)</sup>の二点が指摘されている。

また、礼拝そのものについても、平伏叩頭 (スジュード) の動作を取る際、スンナ派では動物に額をつけることが容認されているのに対して、シーア派では直接地面に、あるいは陶片など土由来のものに叩頭くことが求められているという違いがあるようだ<sup>(29)</sup>。

つまり、イマーム派の流儀での礼拝を行わせるためには、モスクの水場や礼拝所にキズィルパーシュ兵を配置し、信徒たちの動作を監視させれば済むことになる。手法としてはかなり荒っぽいのが、これにより比較的短期間でイマーム派の礼拝作法は住民たちに浸透したものと思われる。

最後に (iv) について。臣民たちがスンナ派の民から受けた過去の虐待への報復として、焚刑という、いわばムスリムとしての極刑を用意したイスマーイールには、果たしてどのような狙いがあったのだろうか。対象者がサファヴィー教団員に限られた場合、それは教主としての彼の責務に基づく行動と言える。だが、被害を訴え出た全住民を対象としていた場合、そこには別の狙いが透けて見える。先行研究によれば、アクコユンル朝時代に信仰隠し (taqīye) をしていた「隠れシーア派」の多くは、スンナ派四法学派のうちシーア派の信条に最も近いシャーフイー派に所属していたという<sup>(30)</sup>。したがって、イスマーイールの目には、シャーフイー派の民の多くが「隠れシーア派」に見えたはずである。一人でも多くの民に信仰隠しを止めさせ、イマーム派の民であることを公言させる。それがこの命令の真の狙いであったと考える。ただし、そういったアミール・マフムードの意図は、残念ながら他の歴史家たちに伝わったとは言い難く、この記事に倣った史料は今の所見当たらない。

#### 4. 『ルップツ・タワーリーフ』とその補完史料からの当該記事の紹介

##### (1) 史料解題

『ルップツ・タワーリーフ』の著者ミール・ヤフヤーは、886年ズー・アルカーダ月19日(1482.1.9)に生まれた(【LT】222)。カズウィーンのサイドの名家サイフィー家 (sādāt-e Şeyfī) 出身で、スンナ派の徒として知られていた。ホーンダミールよりも7歳ほど若く、サファヴィー朝のタブリーズ占領当時19歳であった。当時どこに居住していたかは不明だが、その二、

三年後、すなわち 909/1503-04 年頃から、サファヴィー朝宮廷に帯同する歴史記録者となった。したがって、彼は即位前後の時期のイスマーイールの動向にも、目撃的視点を有していた可能性がある。ただし、スンナ派だったためか、イマーム派への改宗命令の扱いは極めて冷淡で、当該記事も非常に短い。なお、本史料には執筆時現在の暦日として 948 年ズー・アルヒッジャ月 20 日 (1542.4.6) の日付が記されている ([LT] 263)。

一方、『ジャワーヒル・アルアフバル』の著者ブーダーク・カズウィーニーは、916/1510-11 年に生まれた。本作品を書き始めたのは還暦を過ぎてからであり、982/1574-75 年までに執筆を開始、984/1576 年に完成した<sup>(31)</sup>。そのためか、例えば [ZHS] 著者とは実年齢でせいぜい十歳程度しか離れていないにもかかわらず、本文中の単語や文体からはシャー・タフマースプ (サファヴィー朝第 2 代君主：930-84/1524-76 年在位) 時代の時代性が色濃く感じられる。先行史料や文書類によく目を通しており、今回は [LT] の記事を補完する目的から [Javaher] の当該記事を併用する。

## (2) 当該記事の紹介

前章までに紹介したイマーム派への改宗命令は、専らアゼルバイジャン州の定住民に向けられたものであった。では、遊牧民出身のキズイルバーシュに対する命令というものは無かったのであろうか。この素朴な疑問にある程度応えてくれるのが、一つ目の史料『ルップツ・タワーリーフ』である。以下に当該記事を引用する。

史料 5：至高の陛下はありがたくも王都タブリーズに移動なさった。アゼルバイジャンの覇者の玉座は、かのお方のいかにも王に相応しい壮麗さで飾られた。ミンバル壇上と貨幣の面は、「最後の審判の導き」である 12 人のイマームの方々 — 彼らの上に祝福と安寧がありますように — の御名で、そして陛下の尊称 (ラクブ) でもって飾られた。人々 (mardom) はお家の人々の学派 (mazhab-e ahl-e beyt) に入った。そして、緋色の布地 (saqerlāt-e qermezī) から作られた 12 イマーム — 彼らの身の上に平安あれ — の深紅のタージ (tāi-e vahhāi-e davāzda emām) を与えられた。(以下省略) ([LT] 242)

ご覧の通り、ここに記されているのは「その後の変化」であり、今回それは考察対象外であるため、補足史料が不可欠と考えた次第である。この記事についても Calmard 氏と Stanfield-Johnson 氏が紹介済みである。ただ、読者の混乱を避けるためか、波線を付した箇所については両氏共に黙殺している<sup>(32)</sup>。というのも、この一文を額面通りに受け取るならば、キズイルバーシュの代名詞とも言える赤帽子が、お家の人々の学派、すなわち、シーア・イマーム派に改宗した人々全員 (イラン系定住民を含む) に、与えられたことになってしまうから。

そこで、【LT】の記事内容を継承し、より明快に叙述した史料が他にないか探してみた。その結果、二つ目の史料である【Javaher】に、次のような興味深い記事を見出すことができた。

**史料6**：…次のことが命じられた。すなわち、深紅のタージを緋色の布地から12本の髷(davāzda tarak)入りで作り、そして「12イマームへの標識('alāmat be davāzda emām)」と呼ぶべし。ピーリー・タージドゥーズ師 Ostād Pīrī Tāj-dūz は、まず初めに、仕立て及びこのタージ作り(dūkht va īn kesvat)をキズイルバーシュの間で行うべし。ミンバル壇上からフトバを12人のイマームたちの御名で読むべし、と。(【Javaher】22)

史料6の要点を整理すると、次のようになる。

A：命令内容 → B：命令先

- (i) 深紅の布地で12本の髷の入った赤帽子を作るように。その正式な名称は「12イマームへの標識」である。
- (ii) 仕立て及びこのタージ作りについては、まず初めに、キズイルバーシュの間で行うべし。  
→ピーリー・タージドゥーズ師
- (iii) ミンバル壇上から12イマームの御名でフトバを読み。

### (3) キズイルバーシュへのタージ着用命令

上記の(iii)については既に触れたので割愛する。代わりに他の二点について、史料5の波線部も含めた検討を加えることとしよう。まずは(i)について。周知の通り、赤帽子を考案したのはイスマーイールではなく、864/1460年から四半世紀以上サファヴィー教団の教主を務めた彼の父スルターン・ハイダル Solṭān Heydarであった。教団のスーフィーでもあったテュルク系遊牧戦士が「キズイルバーシュ」(赤い頭)と呼ばれるようになったのは、戦闘員全員に着用が命じられたこの赤帽子に因んでのことである<sup>(33)</sup>。したがって、史料5の波線部にある「人々」とは、状況的に見て「キズイルバーシュ」を指すと判断して間違いない。

それでは、イスマーイールが即位後、改めて赤帽子に言及したのはなぜだろうか。その理由として考えられるのは、その着用目的を知らないキズイルバーシュが急増していた可能性である。「12イマームへの標識」と呼ぶよう命じられていることから見て、その着用目的とは、天界から戦況を見守るイマームたちが敵味方の区別をしやすいするためであったに相違ない<sup>(34)</sup>。そして、そのような、古参の幹部たちにとっては常識の部類に入る事柄についても、新参たちの中には必ずしも了解していない者がいた。そこで、改めて王の命令という形で周知徹底が図られた。今の所、そのように理解しておくのが妥当であると考えられる。

また、この赤帽子について、史料5では「与えられた」とされているのに対し、史料6では、

遊牧戦士が自ら「作る」よう命じられている点も興味深い。後者については、史料6の要点(ii)に挙げたように、少々踏み込んだ説明がなされている。まず、ピーリー・タージドゥーズ師<sup>(35)</sup>についてだが、その尊称からタージ作りの親方職人であることが明らかである。彼は採寸や納品のために宮廷に出入りしていたものと察するが、一万人を超える兵士たち全員の分を製作したとは思えない。シャーや重臣たちへの特注品、あるいは下賜用の品を依頼されたのであろう。また、赤帽子は一般住民の間に需要はなく、したがって、市場では売られていなかったはずである。そうすると、この親方職人が初仕事としてなぜキズイルバーシュたちの所に連れて行かれたのか、その理由はもはや明らかであろう。つまり、大多数のキズイルバーシュ兵にとって、タージとは基本的に戦士たちが自ら作る、あるいは妻たちに作ってもらうものだった。そして、タージドゥーズ師が依頼されたのは、タージ作りの実演講習であったに相違ない。つまり、イスマーイールがキズイルバーシュに命じたのは、赤帽子の着用目的と製法を正しく理解した上で自作し、合戦時にはそれをきちんと着用することであったと考えられる。

## 5. サファヴィー朝成立前にイマーム派が公認されていた可能性について

### (1) 版図と共に拡大・縮小する「国教」概念

以上で「シーア派国教宣言」の具体的内容に関する考察を終えるが、未解決の問題がもう一つ残っている。それはシーア・イマーム派が最初に「国教」として認められた時期についてである。残念ながら、その日付を明記する史料は見当たらなかった。ここで「国教」概念について改めて確認しておく。例えばイスマーイールが東西イランの統一を達成した916/1510-11年の時点では、「国教」は「イランの公認宗派」と同義か、それ以上に拡大していたと言える。これが907/1501年のタブリーズ征服時点まで遡ると、「国教」の規模や範囲はかなり縮小して、「アゼルバイジャン州及びシルワーン州の公認宗派」程度の意味になる。現在、国家としてのサファヴィー朝の歴史はそれ以上遡ることはできないとされている。したがって、国教化の原点だった「シーア派国教宣言」は、タブリーズ征服年である907/1501年の出来事と見て何ら問題はない、というのが現時点での共通認識なのである。逆に言えば、イマーム派公認の年としてそれ以前の暦年を示す証拠が発見された場合、最初の「シーア派国教宣言」は、サファヴィー朝成立以前に行われたと考えざるを得なくなる。そして、その証拠は、16世紀後半成立の誰もが知るペルシア語年代記から、意外なほどあっさり見つかった。

### (2) ヒジュラ暦906年を読み込んだ三つのターリーフ

『ヌサヒ・ジャハーン・アーラー』は972/1564-65年成立のイスラーム通史、『フラーサトッ・タワーリーフ』は999/1590-91年成立のサファヴィー家およびその王朝の通史である。したがっ

て、「シーア派国教宣言」については、本来、二次的重要性しか持ち得ない文献である。しかしながら、両作品は日付の記載が綿密かつ正確という点で共通しており、ターリーフ、すなわち、紀年銘の史料的価値についても十分に理解していたようだ<sup>(36)</sup>。幸いなことに、双方ともイマーム派公認の暦年を読み込んだターリーフを、二つずつ収録している。重複しているものが一つあるので、我々は三つのターリーフからその暦年を算定することができる。それでは、当該記事を引用してみよう。

**史料7:**…この年、正しきマズハブであるイマーム派 (mazhab-e ḥaqq-e Emāmīye) が広まった。《我らのマズハブが正しい》という真実を語る文言が同年のターリーフ (tārīkh-e ān zamān) である。([JA] 265) / 'Allāme Qazvīnī 氏旧蔵写本には《正しいのは貴方<sup>(37)</sup>のマズハブ》とある。([JA] 265n)

**史料8:**…またこの年 (ヒジュラ暦 906 年), 12 人のイマームたち —彼らに神の祝福がありますように— の正しきマズハブが広められ, 三人の呪われた者たちへの呪詛 (la'n-e malā'in-e thalāthe) がミンバル壇上から公然と言い放たれた。その真の文言は《貴方のマズハブが正しい, 我らのマズハブが正しい》であり, それは即ち, 同年のターリーフである。([KhT] 64)

史料7および史料8からターリーフを抽出し, アブジャド (abjad) の数値を計算すると, 次のような結果となる。

$$(i) \text{《我らのマズハブが正しい (مذهبننا حق)》} = ق + ح + ا + ن + ب + و + ذ + م = 100 + 8 + 1 + 50 + 2 + 5 + 700 + 40 = 906$$

$$(ii) \text{《正しいのは貴方のマズハブ (الحق مذهبك)》} = ك + ب + و + ذ + م + ق + ح + ل + ا = 20 + 2 + 5 + 700 + 40 + 100 + 8 + 30 + 1 = 906$$

$$(iii) \text{《貴方のマズハブが正しい (مذهبك الحق)》} = ق + ح + ل + ا + ك + ب + و + ذ + م = 100 + 8 + 30 + 1 + 20 + 2 + 5 + 700 + 40 = 906$$

驚くべきことに、三種の異なるターリーフの合計はすべて「906」で一致する。そして、この事実に着目した先行研究は見当たらない。サファヴィー朝では、何か大きな出来事が生じると、詩人たちは一斉にこのターリーフ作りに取り掛かり、その出来栄を競い合った。単純明快なものほど上出来で、一度傑作ができるとそれが定番となった<sup>(38)</sup>。だが、この三作品の収まりの悪さはどうであろうか。イマーム派の雅称「正しきマズハブ (mazhab-e ḥaqq)」をベースにターリーフを作り始めたものの、なかなか数値が合わず、アラビア語の文法を駆使してよ

うやく「906」を読み込んだ苦心の作である。逆にいえば、「正しきマズハブ」、すなわち、イマーム派にとって「ヒジュラ暦 906 年」という暦年には、必ずや大きな意味があるはずだということが、このターリーフから確信されるのである。

### (3) 国家成立に先行するフトバとスィッカ

イマーム派がヒジュラ暦 906 年に公認されたことを示すターリーフが三種も見つかった。これにより、「シーア派国教宣言」がサファヴィー朝建国以前の出来事であった可能性を想定せざるを得なくなった。ところで、イスラーム世界における国家成立の要件としてよく挙げられるのは、フトバとスィッカの施行である。ある有力者の名前が金曜礼拝のフトバで読み上げられる、あるいは、新たに鑄造された貨幣の裏面にそのラカブが打刻されるといった動きから、都市の住民たちは支配者の交代を知った。だが、既存の支配者にとってそれは反乱以外の何物でもなく、鎮圧のため大軍を差し向けることで覇権争いが勃発する。そして、もし反乱者側が敗北した場合、フトバとスィッカの件は「無かったこと」にされる。

Rabino di Borgomale 氏によれば、フトバとスィッカの特権はしばしば実際の即位よりも前に行われたという<sup>(39)</sup>。それは反乱者側が勝利した場合の当然の帰結と言えよう。前章までに示したイスマールの指示・命令に、フトバとスィッカへのイスマールの名前の挿入が含まれていなかったのは、あるいは既にそれが実施されていたためかも知れない。

つまり、反旗を翻してから実際に覇権を獲得し、新王朝を成立させるまでの間に、最初の「シーア派国教宣言」が行われていた可能性は大いにあり得る。無論、そのためには国家成立のために必要な条件が万端整えられていなければならない。そのための条件として想定すべきなのは、①常備軍の設置、②領土の獲得、③中央政府の発足の三点であろう。このうち、①と②については、先行研究により「ヒジュラ暦 906 年」の出来事であることがほぼ確定している<sup>(40)</sup>。したがって、残る③についても同年の出来事だったことが裏付けられた場合、サファヴィー朝の建国前に「シーア派国教宣言」がなされた可能性は、俄かに現実味を帯びてくるであろう。

### (4) 「アゼルバイジャンの鍵」の恭順と中央政府の誕生

Roger M. Savory 氏は、シャー・イスマールによる最初の閣僚人事について、タブリーズ征服後に行われたと説明する<sup>(41)</sup>。建国後に中央政府が発足するというのはある意味当然で、ホーンダミールをはじめ史料的な裏付けも充分 ([HS] 468, [ZHS] 126, [JA] 266) となれば、流石にこの説に異論を唱えるのは難しいように見える。

だが、[HS] に準ずる史料的価値を有する [LT] には、定説とは全く異なる内容の記事がある。少々長くなるが、これは本稿の核心部分でもあるので、全文を引用しよう。

史料9:…また、その年（=ヒジュラ暦906年）、宮廷の冬営はシルワーンのマフムード・バード（Maḥmūd-ābād）でなされた。この冬営中、長年にわたり諸スルターンのワズィールを務めてきた「ワズィールの隠れ家」ことアミール・シャムスッディーン・ザカリヤー Amīr Shams ad-Dīn-e Zakariyā が、栄えある陛下（Navvāb-e kām-yāb）の敷物に口づけするという至高の榮譽に浴した。いかにも王らしい恩恵の数々が彼に施された。ありがたくも至高のディーワーンのワズィールの地位が彼に与えられた。人々は彼を「アゼルバイジャンの鍵」（kelid-e Āzarbāyjān）と呼んだ。

サドル（宗務長官）の地位は、長年の功勞を称えられていたマウラーナー・シャムスッディーン・ギーラーニー Moulānā Shams ad-dīn-e Gilānī に下賜された。勝利の徴たるガーズィー階層からは、フサイン・ベイグ・ララ・シャームルー Ḥoseyn Beyg-e Lale-ye Shāmlū とアブダール・ベイグ・ダダ Abdāl Beyg-e Dade が、[それぞれ] 大アミールとコルチバーシーになった。

この後、ヒジュラ暦907年<sup>(42)</sup>某月、アルワンド・ベイグ [の撃退] とアゼルバイジャン州の征服を意図して、シルワーンから出立した。ナフジャヴァーン近郊のシャルールという地において、アルワンド・ベイグおよびアクコユンルのアミールたちと戦った。そして、勝利した。アクコユンルのアミールおよび兵士たちからはおよそ8,000名がこの合戦で殺された。アルワンド・ベイグはディヤールバクルの境域へと逃亡した。〔LT〕241-242〕。

この記事に明瞭に示されているように、サファヴィー朝初の閣僚任命は、タブリーズ征服後どころか、アクコユンル朝君主アルワンドとの決戦だったシャルールの戦いよりもさらに前の出来事として描かれている。しかも、閣僚任命はヒジュラ暦906年の、シャルールの戦いについては907年の出来事として明確に区別されている。西暦でいえばどちらも1501年の出来事ではあるが、その数ヶ月の時間差が持つ意味は極めて大きい。注目すべきなのは、ホーングミールの見解とは違うことを認識した上で、あえてミール・ヤフヤーの意見に倣った歴史家が他にも複数存在したという事実である〔IN〕13,〔AT〕968〕。

では、このタイミングであえて中央政府の発足に踏み切るだけの特別な事情があったのであろうか。史料9をみる限り、主要閣僚の人事決定は、アクコユンル朝からの亡命者アミール・ザカリヤーのワズィール任命をきっかけに行われたようだ。Jean Aubin氏によれば、この人物はタブリーズで代々シャイフル・イスラームを輩出したシーア派の名家クジュジー家の出身であった<sup>(43)</sup>。ただ、「長年にわたり諸スルターンのワズィールを務めてきた」というくだりについては、かなり疑わしい。肝心のアクコユンル朝の基本史料、例えば、『キタービ・ディヤールバクリヤー（Ketāb-e Diyārbakrīye）』や『アーラムアーラーイー・アミーニー（Ālam-ārā-ye Amīnī）』などに彼の名前が見当たらないからである<sup>(44)</sup>。年齢も比較的若かった可能性が高く、

「アルワンド・パーディシャーのワズィールだった」とのみ記すブーダークの記事が実像に近いと思われる（【Javaher】20）。

では、ザカリヤールはなぜイスマーイールから気に入られ、文官最高位のワズィール職に抜擢されたのか。その謎を解く鍵は、奇しくもイスマーイールから付けられた「アゼルバイジャンの鍵」という渾名（【IN】13, 【JA】265, 【TA】39, 【KhT】63）にあるように思う。そもそも鍵とはなんだろうか。それは第一に、力ではこじ開けることができないものを容易に開ける道具である。また、イスラームの都市民にとって鍵とは城門を開くもの、すなわち、降伏・臣従の象徴である。つまり、'Abdol-Hoseyn Nava'i 氏も指摘している通り、彼の恭順と伺候は「アゼルバイジャン征服の鍵 (kelid-e fath-e Āzarbāyjan)」として、イスマーイールから歓迎されたのである<sup>(45)</sup>。

以上の経緯により、国家成立のための三条件は、ヒジュラ暦 906 年の終わり頃、すなわち、西暦 1501 年春頃までにはすべて出揃っていたことになる。（→【表 2】）三種のターリーフの一致と合わせて考えるならば、最初の「シーア派国教宣言」は 906/1501 年の春頃、シルワーン州内の某所にて発せられたと考えるのが妥当と結論付けられる。

## おわりに

小論を閉じるにあたり、冒頭で掲げた問題提起がどのように解決されたのか、改めて確認しておきたい。まず、Arjomand 氏が提唱した「シーア派国教宣言」の要点、すなわち、①「西暦 1501 年秋」に、②「イスマーイールが金曜礼拝に赴き」、③「シーア派の名士であるハティープに」、④「シーア・十二イマーム派を王朝の公認宗教とする旨を宣言させた」の四項目のうち、②と③については史実ではないことが判った。①については、まずはサファヴィー朝成立前の「西暦 1501 年春頃」（ヒジュラ暦 906 年の終わり頃）を想定すべきであろう。そして、タブリーズ征服後、改めて同様の命令が下されたものと理解したい。また、④については史料 2 や史料 6 でも裏付けられるので、これだけは正しいと判断される。

したがって、あくまでも筆者の個人的見解ではあるが、「シーア派国教宣言」というある種の誤解を生みやすい呼び名を、今後も引き続き用いる積極的な理由は無いように思われる。「シーア派国教宣言」の実態とは、シーア・イマーム派への改宗あるいは転向命令の総体であった。したがって、シャー・イスマーイールによる「イマーム派への改宗命令」といった呼び名で充分と考える。肝心なのはシャーが命じた内容であり、それは、概ね以下に掲げる五項目であったと言える。

- (1) 金曜礼拝のフトバから正統カリフの名前を外し、代わりにアリーを含めた 12 人のイマームたちの名前を入れること。
- (2) 礼拝その他のイバーダートについては、イマーム派の流儀で行われるよう指導監督する

こと。

- (3) アザーンにおいては、シャハーダの二証言に続けて「アリーは神の友であると私は証言する。」の文言（二回繰り返し）を、また、二つの「いざ来たれ」の後に「いざ至善に来たれ。」と「ムハンマドとアリーは至高の人間なり。」の文言（それぞれ二回繰り返し）を入れること。
- (4) 各地のモスクにあるミフラーブを、イマーム派の流儀に合わせて改修すること。
- (5) キズイルバーシュたちは赤いタージの着用目的とその作り方を理解した上で、合戦時にはそれをきちんと着用すること。

基本史料における「シーア派国教宣言」の記事には、「その後の変化」についても詳述したものが多く、今回は考察対象外とした。そこにはイマーム・アリーの敵たちへの呪詛行為の激化など興味深い事実も含まれる。だが、それらに関してはよりマクロな観点、すなわち、イスラーム史全体の流れからの検討が不可欠であろう。幸いにも、シャー・タフマースプ時代の幾つかの年代記には、サファヴィー朝史家独自の視点による「シーア派小史」が記されている。「その後の変化」の発展形とも言えるそれらの記事については、近く別稿を立てて論ずる事にしたい。

#### 注

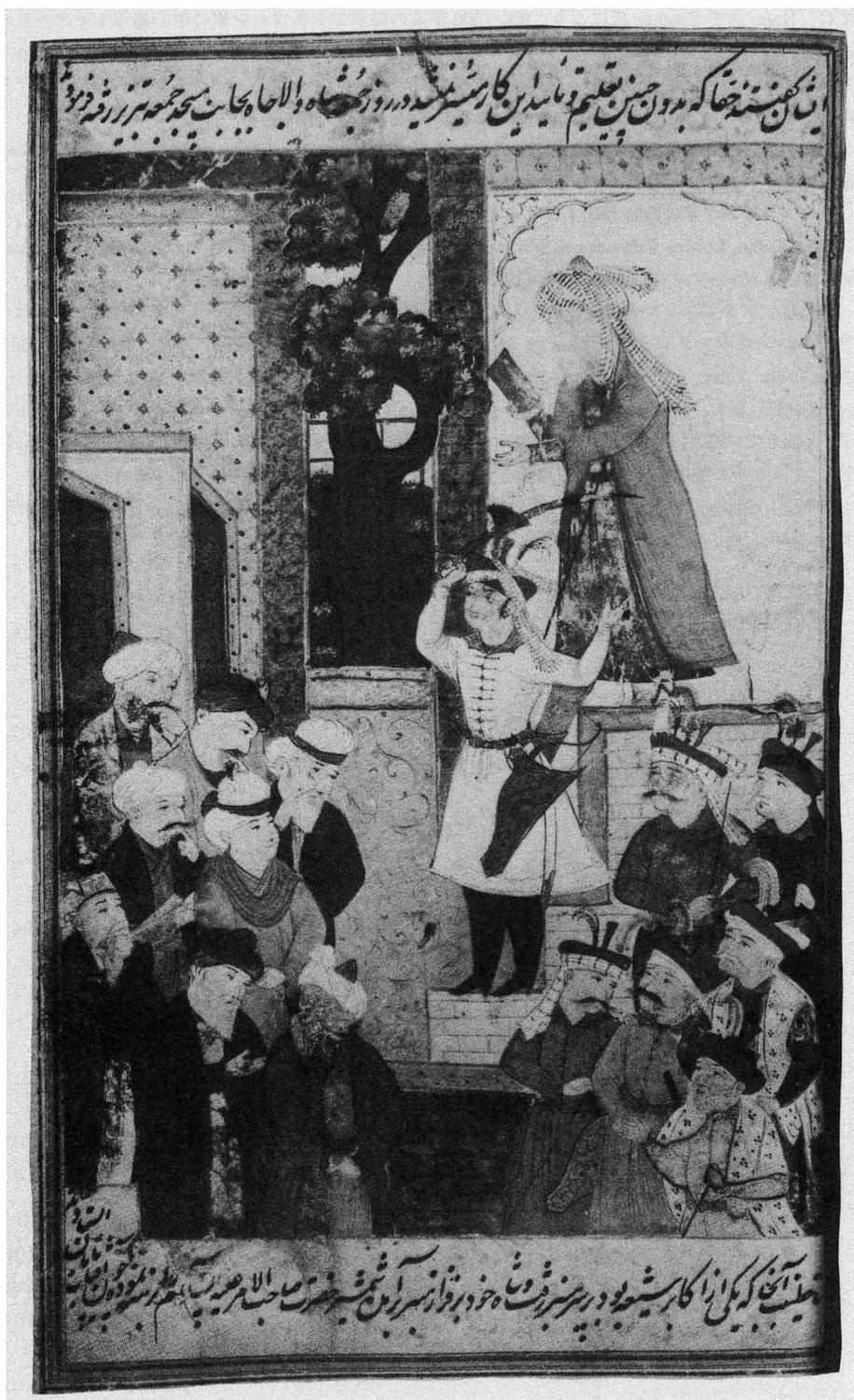
- (1) Said Amir Arjomand, *The Shadow of God and the Hidden Imam : Religion, Political Order, and Societal Change in Shi'ite Iran from the Beginning to 1890*, Chicago and London (1984), p.vi, p.109. このミニアチュールは、サファヴィー朝建国を象徴する絵として、Newman氏の著書の表紙カバーにも採用されている。(Andrew J. Newman, *Safavid Iran : Rebirth of a Persian Empire*, London and New York (2006).)
- (2) 例えば、前近代イランにおける十二イマーム派受容の歴史的展開を論じた Abisaab 氏や Newman 氏の専著では、「シーア派国教宣言」について全く触れられていない。Rula Jurdi Abisaab, *Converting Persia : Religion and Power in the Safavid Empire*, London and New York (2004). Newman, *Twelver Shiism : Unity and Diversity in the Life of Islam, 632 to 1722*, Edinburgh (2013).
- (3) Jean Calmard, Les Rituels Shiites et le Pouvoir L'imposition du shiisme safavide : eulogies et malédictions canoniques, *Etudes Safavides*, Paris-Téhéran (1993), pp.109-150. Rosemary Stanfield-Johnson, The Tabarra'iyan and the Early Safavids, *Iranian Studies*, 37-1 (2004), pp.47-71.
- (4) Ghulām Sarwar, *History of Shāh Ismā'il Šafawī*, Aligarh (1939), p.10.
- (5) 羽田亨一["Ross Anonymous"]の名で知られるシャー・イスマアイル I 世の傳記の製作時期について、『東洋史研究』48-3 (1989), 108-129 頁。A. H. Morton, The Date and Attribution of the Ross Anonymous : Notes on a Persian History of Shāh Ismā'il I, *Pembroke Papers I : Persian and Islamic Studies in Honour of P. W. Avery*, Cambridge (1990), pp.179-212.
- (6) 著者名・書名共に不明であるこの二種類の校訂テキストが、同一史料の別写本を底本としていることについては既に1980年代中葉、McChesney氏が指摘していた。(R. McChesney, " 'Ālamārā-ye Šāh Esmā'il", *Encyclopaedia of Islam, second edition* (= *EI2*), pp.796-797) また、大英図書館所蔵 Or.3248 写本もそれらと同一史料の別写本であることについては、Morton氏およびStanfield-Johnson氏の前掲論文にて主張されている。今回、筆者が【ASS】を選択したのは、彼らの見解に倣ったものである。

- (7) 「ウズン・ハサン」の愛称で知られる英王。ハサンはサファヴィー家と姻戚を結んでおり、イスマールールの母と父方の祖母は、それぞれ彼の娘および姉妹に当たる。しかしながら、彼の子息で第7代君主だったヤークーブ(1478-90年在位)の時代から、アクコユンル朝はサファヴィー家と敵対するようになる。(Savory, *I. Dynastic, political and military history, "Şafawids", EI2, p.766.*)
- (8) 桜井啓子『シーア派一抬頭するイスラーム少数派—』中央新書(2006年), 67頁。なお、桜井氏は、Arjomand氏が「シーア派国教宣言」を提唱した著書の書評もされている。(桜井啓子, (書評) Said Amir Arjomand, *The Shadow of God and the Hidden Imam: Religion, Political Order, and Social Change in Shi'ite Iran from the Beginning to 1980*, 『オリエント』28-2(1985年), 90-96頁.)
- (9) 久保一之氏の研究によれば、メルヴ近郊の戦いでウズベク軍の首領シャイバーニー・ハーンを斃したのがヒジュラ暦916年ラマダーン月1日(1510.12.2)。シャー・イスマールールの勝利通告書(fath nāme)がヘラートにもたらされたのが同月8日(1510.12.9)。その後、勅書(neshān)が届けられ、これに続いて大アミールのアミール・ナジム・サーニーが到着。最後に、住民総出の歓迎の中、イスマールールがヘラート入りしたのが同月20日(1510.12.21)の朝のことだったという。日付だけでなく、勝利通告書と勅書をもたらしたサファヴィー朝側要人の名前も、また、金曜モスクで命令内容を読み上げたハティープの名前も、『ハビーブ・スィヤル』には克明に記録されている。(久保一之『16世紀初頭のヘラート—二つの新興王朝の支配—』『史林』71-1(1988年), 137-139頁.)
- (10) Stanfield-Johnson, *op. cit.*, p.56.
- (11) 12イマーム派の歴代イマームの名前は以下の通り。①アリー 'Alī ②ハサン Ḥasan ③フサイン Ḥoseyn ④アリー 'Alī Zeyn al-'Ābedīn ⑤ムハンマド Moḥammad al-Bāqer ⑥ジャアファル Ja'far as-Şādeq ⑦ムサー Mūsā al-Kāẓem ⑧アリー(イマーム・リーダー) 'Alī ar-Rezā ⑨ムハンマド Moḥammad at-Taqī ⑩アリー 'Alī al-Hādī ⑪ハサン Ḥasan al-'Askarī ⑫ムハンマド Moḥammad al-Montazer
- (12) ブワイフ朝時代のヒジュラ暦352年ムハッラム月10日(963.2.8), 首都バグダードにてイマーム・フサインの殉教を記念する「アッシューラー(Āshūrā)」祭が史上初めて公けに挙行された。また、352年ズー・アルヒジャ月18日(964.1.7)には、預言者ムハンマドがイマーム・アリーを後継者に示したとされる「ガディール・フンムの祝日(Īd-e Ghadir-e Khomm)」が盛大に祝われた。いずれも同王朝の君主でシーア派保護者としても知られるムイッズ・アッダウラ・アフマド Mo'ezz ad-Doule Aḥmad(334-356/945-967年在位)の命令によるものであった。(Heinz Halm, *Shiism*, Edinburgh(1991), pp.48-49.)
- (13) この部分について、ハサン・ベイクは「諸州のハティープたち」(『AT』976)と、また、カーディー・アフマド・クンミーは「タブリーズのハティープ(khaṭīb-e ān shahr)」(『KhT』73)としている。
- (14) シーア派にとってアリーの敵たちに対する呪詛や誹謗は、彼らの宗教活動の中核に位置していたようだ。アッバース朝時代の事例研究としては、清水和裕「アッバース朝バグダードにおける教友呪詛」『西南アジア研究』77(2012), 19-38頁。を参照。
- (15) Calmard, *op. cit.*, p.122.
- (16) 久保前掲論文, 148頁, 註51.
- (17) 拙稿「シャー・タフマースプI世時代のイラン史研究のための基本史料」『駿台史学』129(2006年), 54-56頁。
- (18) Sarwar, *op. cit.*, p.10.
- (19) Calmard, *op. cit.*, pp.114-115.
- (20) Stanfield-Johnson, *op. cit.*, p.57. テヘラン版本【RS】でなく、あえて異同の別写本を典拠に選んだ意図については不明である。ただ、この件に関する記事を有する校訂テキストではすべて同一文(『ZHS』125, 『ZHS2』65, 『RS』154)である以上、やはり、「各モスクのスナ派の民のミフラーブを改修するよう命じられた」と解釈するのが妥当であろう。
- (21) シーア派法学者アブドゥル・アール 'Abd al-'Āl(d.982-83/1584-85)(高名なムジュタヒドだったアル=カラキー al-Karakīの子息)により発せられたファトワーをきっかけに、この問題はシャー・タフマースプ時代に活発に議論されたとのこと。(Stanfield-Johnson, *op. cit.*, p.57n.)

- (22) Michel M. Mazzaoui, *The Origins of the Ṣafawids : Shi'ism, Ṣūfism, and the Ghulāt*, Wiesbaden(1972), pp.1-2.
- (23) Stanfield-Johnson 氏によると、ムハンマド・ユースフ・ワーリフ Moḥammad Yūsof Vāleh-e Esfahānī-ye Qazvīnī 著「フルディ・バリーン (Khold-e Brīn)」(1078/1667-68 年成立)にもハサン・ベイグと同様の記事があるが、そちらでは経過年数に関する計算ミスは訂正されているとのこと。ただ、正しくは何年間だったのかという肝心な点について説明が抜けている。(Stanfield-Johnson, *op.cit.*,p.58) 同書のサファヴィー朝初期を扱った箇所は、現在未刊行であるため、筆者想定 of 「455 年間」と果たして合致するかどうか、今の所確認できていない。
- (24) Moojan Momen, *An Introduction to Shi'i Islam : The History and Doctrines of Twelver Shi'ism*, London (1985), p.178.
- (25) Momen, *op.cit.*, pp.178-180.
- (26) 【ZHS2】校訂者 Moḥammad 'Alī Jarrāhī 氏の説明によると、本文中に ( ) 付きで記された箇所は、底本を含めたいくつかの写本には記されていないことを示す。したがって、このウドゥーに関する一文は、1042/1632-33 年の、あるいは 1047/1637-38 年の日付をもつ一写本の筆耕者の、個人的見解が示されたものと思われる。(【ZHS2】序文 p.37, p.263.)
- (27) Momen, *op.cit.*, p.179.
- (28) E. Chaumont, "WUḌŪ", *EI2*, pp.218-219.
- (29) Momen, *ibidem*.
- (30) Hans Robert Roemer, *Persien auf dem weg in die Neuzeit : Iranische Geschichte von 1350-1750*, Beirut (2003), p.227. シャーフィイー派の信条のどこがシーア派に近かったかといえば、やはり正統カリフ呪詛に対する寛容さであったらしい。例えばハナフィイー派では、目上の者を侮辱する者は「不信心者」とされるのに対して、シャーフィイー派では「法的に容認される口撃」とされていたとのこと。下記の旅行記に記された宗教論争を参照。(Sidi Ali Reis, *The Travels and Adventures of the Turkish Admiral : in India, Afghanistan, Central Asia, and Persia, during the Years 1553-1556.*, trans. A. Vambery, London (1899), p.97.)
- (31) 拙稿「シャー・タフマースプ I 世時代のイラン史研究のための基本史料」, 64-66 頁。
- (32) Calmard, *op.cit.*, p.114, Stanfield-Johnson, *op.cit.*, p.56.
- (33) イマーム・アリーからハイダルへの夢のお告げに由来するとされる。ウズン・ハサンはこの赤帽子に好意的だったが、子息のヤークーブは後にこの帽子の着用を、臣民にはもちろん、サファヴィー教団のスーフィーたちにも禁じたという。(Savory, "KIZIL-BĀSH", *EI2*, p.243.)
- (34) 12 人のイマームたちがバルザフの世界ではなく、天上世界に住んでいると考えられていたことは、例えばアミール・マフムードの関係記事に明らかである (【ZHS】 126, 【ZHS2】 66)
- (35) この人物の名前は不明だが、例えば、イスマーイールの三男サム・ミールザーが 957/1550 年ごろ編纂した詩人伝には、ナーズキー・タブリーズィー Nāzokī-ye Tabrīzī というタブリーズ出身のタージ作り職人の小伝および詩作品が収録されている。(Sām Mīrzā Ṣafavī, *Tazkere-ye Toḥfe-ye Sāmī*, ed. Rokn ad-Dīn Homāyūn Farrokh, Tehrān (1347AHS/1968), p.262.)
- (36) 拙稿「シャー・タフマースプ I 世時代のイラン史研究のための基本史料」, 61-62 頁, および 68-70 頁。
- (37) 「貴方」とは誰を指すのか。ミール・ヤフヤーは「イマーム派」の代わりに、度々「ムルタダーの正しきマズハブ (mazhab-e ḥaqq-e Mortazaḥavī)」という美称を用いている (【LT】 238)。ムルタダー、すなわち、イマーム・アリーのことを指すと考えるべきであろう。
- (38) 拙稿「《タッカルー部の禍》のターリーフで知られる部族間内訌について」『明大アジア史論集』10 (2005 年), 55 頁を参照されたい。
- (39) H.L. Rabino di Borgomale, *Coins, Medals, and Seals of the Shāhs of Īrān, 1500-1941*, London (1971), p.26.
- (40) ①については、羽田正「サファヴィー朝の成立」『東洋史研究』37-2 (1978), 39 頁を参照。②につい

ては、Halm氏やRoemer氏により、906/1500年末の時点でシルワーン州の中心都市シャマーヒーを得たこと、シャフリ・ノウにはサファヴィー教団初の知事としてフラファー・ベイグ Folaḡā Beygが任命されたこと（【HS】Ⅳ:459-460）、翌年春までにはもう一つの中心都市パークーが同教団の支配下に入ったことが指摘されている。（Halm, *op.cit.*, p.84. Roemer, *op.cit.*, p.247）

- (41) Savory, The Principal Offices of the Ṣafawid State during the Reign of Ismā'īl I (907-30/1501-24), *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, XXⅢ (1960), p.102.
- (42) ヒジュラ暦907年は西暦1501.7.17より始まる。
- (43) Jean Aubin, Etudes Safavides. I. Šāh Ismā'īl et les Notables de l'Iraq Persan, *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 2-1 (1959), p.61.
- (44) 例えば、アクコユンル史研究の第一人者 Woods 氏の著書に、クジュジー家出身のワズィールはシャイフ・ムハンマド・クジュジー Sheykh Moḡammad Kojujī 一人しか登場しない。（John E. Woods, *The Aqqyunlu: Clan, Confederation, Empire*, (revised and expanded edition), Salt Lake City (1999), pp.152-155）なお、アミール・ザカリヤーについて、アブディー・ベイグはシャイフ・ムハンマドの「息子」と記している（【TA】39）。一方、ガッファーリーヤコンミーは「孫」と説明するが（【JA】265, 【KhT】63）、そうになると彼の推定年齢は相当若くなり、史料9の記述とは必然的に矛盾する。
- (45) 'Abdol-Ḥoseyn Navā'ī, *Shāh Ṭahmāsb-e Ṣafavī : Asnād o Mokātebāt-e Tārīkhī hamrāh bā Yāddāshthā-ye Taḡsīlī*, Tehrān (1350AHS/1971), p.3.



【図1】大英図書館 Or.3248 写本所収ミニアチュール

出典：Said Amir Arjomand, *The Shadow of God and the Hidden Iman*, Chicago and London (1984), p.vi. 口絵

[表1] シャー・イスマールが命じたアザーンの文言と順序（推定）

順番	繰り返し回数	文言
①	4回	アッラーは偉大なり。
②	2回	アッラーの他に神はいないと私は証言する。
③	2回	ムハンマドは神の使徒であると私は証言する。
④	2回	アリーは神の友であると私は証言する。
⑤	2回	いざ礼拝に来たれ。
⑥	2回	いざ救済に来たれ。
⑦	2回	いざ至善に来たれ。
⑧	2回	ムハンマドとアリーは至高の人なり。
⑨	2回	アッラーは偉大なり。
⑩	2回	アッラーの他に神は無し。

注. 夜明け（ファジル）の礼拝時限定の「礼拝は睡眠に勝る。」の文言については、削除されたものと思われる。

[表2] シャー・イスマール年表

ヒジュラ暦	西暦	年月日	出来事
892	1487	7月17日	イスマール・ミールザー誕生。
893	1488	7月1日	父スルターン・ハイダル戦死。長兄アリーがサファヴィー教団主となる。
894	1489	春	母や兄たちと共にファールス州イスタフル城砦に投獄される。
895	1490		
896			
897	1491		
	1492		
898	1493	8月初め	ルスタム・ベイグの命令により、イスタフル城砦から釈放される。
899			ルスタムの陣営近くで軟禁生活。
900	1494	夏	脱出に成功するも長兄アリーは戦死。イスマールがサファヴィー教団主となる。
			逃亡生活の始まり。アルダビールにて潜伏生活。
901	1495		アルダビールからギーラーン地方ラシュトに亡命。
		12月	ラシュトを離れ、ラーヒージャーンに亡命。
902	1496		
			ルスタムがイスマール逮捕のためラーヒージャーンに軍隊を派遣。
903	1497	7月	ルスタムが内戦により戦死。イスマールの長い逃亡生活が終わる。
		1498	
904		1499	小アジア・シリア各地の遊牧民に決起を呼びかける檄文を送付。
	905		8月下旬
906		1500	冬
	夏		アルジンジャーンに7,000名のキズイルバーシュが結集。 <b>〔常備軍の成立〕</b>
	12月		シルワーン・シャーとの会戦（ジャバーニーの戦い）に勝利。
	年末	重臣の一人をシャフリ・ノウ知事に任命。（シルワーン州での初の知事任命）	
907	1501	年末	マフムダーバードにて冬営中、アミール・ザカリヤーが政治亡命。
		春	初の閣僚人事が決定。 <b>〔中央政府の樹立〕</b>
907	1501	春	バークー城砦を占領。シルワーン州の大半を領有。 <b>〔領土の獲得〕</b>
		夏（秋？）	アクコユル朝君主アルワンドとの会戦（シャルールの戦い）に勝利。
		夏（秋？）	タブリーズ征服。サファヴィー朝の成立。アゼルバイジャン州全土領有。

## Shāh Ismā'īl's Declaration of Shi'ism as the State Religion of Iran: How was It Described in Chronicles of the Early Ṣafawids?

HIRANO Yutaka

Shāh Ismā'īl (1487-1524; r. 1501-1524) determined Imāmī shi'ism as the official religion of the Ṣafawid Dynasty. It was not the shah himself who declared it but he ordered preachers to read *khutbah* in the name of twelve *imāms* [leaders] on top of the pulpits. S. A. Arjomand considers that shah's decision as "declaration of shi'ism as the state religion of Iran." Arjomand, however, bases his hypothesis on a biography of Shāh Ismā'īl, written more than 150 years after his death.

This paper intends to verify Arjomand's hypothesis, referring to chronicles of the Early Ṣafawids. The author finds out that the "declaration of shi'ism as the state religion" was in fact a collection of the shah's following orders:

1. To remove the name of the first four Caliphs from *khutbah* for Friday sermon, and instead to include the names of twelve imāms, including 'Alī b. Abī Ṭālib, the fourth Caliph (ca. 600-661).
2. To guide and supervise prayer and other *'ibādāt* [religious duties of worship] in Imāmī shi'ism.
3. To include the three statements, "I bear witness that 'Alī is the best vice-regent of 'Allāh." , "Make haste towards the best deed." and "Muḥammad and 'Alī were supreme human beings" in *azān* [call for worship].
4. To modify *mihṛāb* [sacred alcoves] of mosques in every region into the Shī'a style.
5. To let *the Qizilbāsh* [cavalry soldiers mainly consisting of Turks] understand the purpose of wearing red *tāj* [cap] and their production methods and wear them during battles.

**Keywords:** Medieval Islamic history, shi'ism, Ṣafawid Dynasty, Shāh Ismā'īl.